日本統治前の台湾台中盆地における大雅の市街地形成

山　下　昭　洋*

キーワード：台湾 、台中、大雅、市街地形成 、日本統治前

１．はしがき

台中市大雅区のもともとの地名の起こりは、日本統治時代の1929年に台湾総督府地方官官制改正の際、それまで使われていた「埧雅」から縁起の良い日本式の文字を充てて「大雅」となったとされる。この旧称には「埧雅（baa3-ngaa5）」[1]・「壩仔（pà-á）」[2]・「巴仔（pa-a）」・「豹仔（pà-a）」「埔仔（poo-a）」がある。「埧雅」の発話方法は客家語（粤語）である。それ以外は閩南語（びんなんご・ミンナンご）の発音である。地名の由来については、この地に住んでいた先住民の言葉からの変化で「荒埔草地（荒れた河原の草地）」を意味する「阿河巴 aa3-ho4-baa1（粤）a-hô-pa（閩）」が訛ったという説が有力となっている[3]。

大雅区は台中市の一角をなす地方自治体の一つとなっている。ここは2010年12月25日の台中県市との合併までは旧台中県内の自治体の一つであった。台中市は合併したことにより、行政院直轄市（直轄市）[4]に昇格した。直轄市に変わると、市長が行政院会議（閣議）に参加できるなどの権限を有すことになり、中央政界にも強い影響力を有することになる。2017年８月４日の台湾内政部[5]の発表によると、台中盆地の中心に位置する台中市の人口は７月末日現在、2,778,182人となり、高雄市（2,777,873人）を追い抜き台湾第二の都市となった[6]。人口増加率も、直轄市の中では桃園市（19.74‰）に次いで、２番目に多い8.27‰の増加率[7]となっており、現在もなお人口の集中が進んでいる都市である。また、台中市は台湾中部[8]の中核都市であり、台湾高等法院（高等裁判所）[9]、最高行政法院の下部法院[10]が設置されている。国立の自然科学博物館・美術館・国家歌劇院などの文化施設も所在している。

台中市は、台中盆地の中央を貫流する烏渓以北の地を占める行政区で、台中市政府の下に29の区がある（図１・表１）。内訳は旧台中市内の区が８区、旧台中県の区が21区である[11]。大雅区の人口は2016年12月現在94,488人で、台中市内において11番目に人口の多い区である。しかし、都心部にあたる旧台中市内の区を除いた周辺区の中での順位では、１．大里区、２．太平区、３．豊原区、４．潭子区に次いで５番目に人口の多い区である。台湾における地方自治の最小単位は里である[12]。大雅区には合計15の里がある（図２・表２）。

2010年に行政院主計処は旧台中市を中心にした大都市

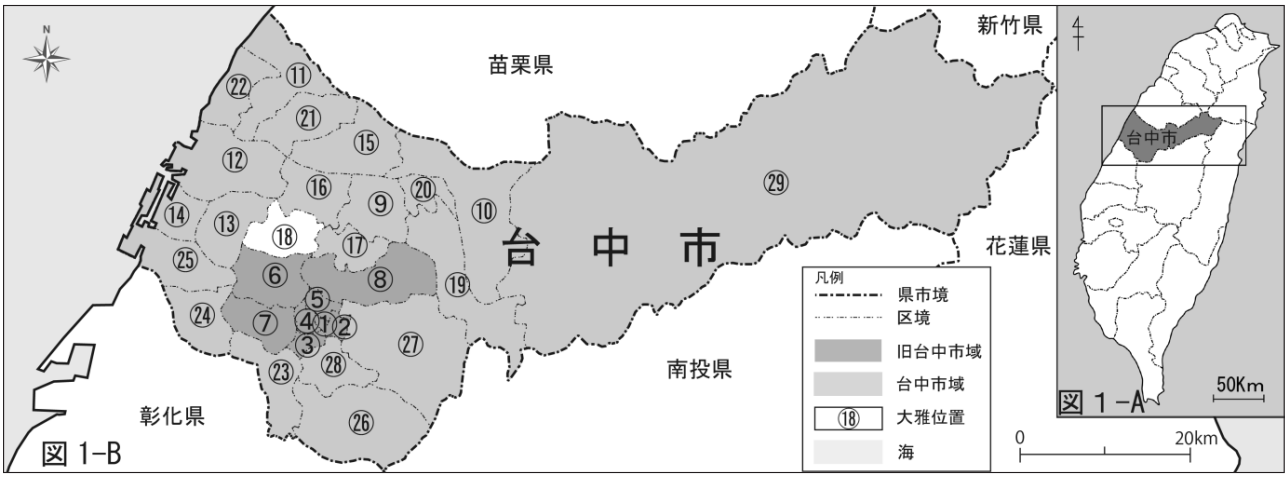

図１：台中市位置図と台中市区位置図

参照：「台中市空間地図査詢系統」 作成：山下昭洋

* 静宜大学日本語文学科助理教授・立正大学客員研究員

表１：台中市政府行政区と人口表

No.	区名	戸数	人口	No.	区名	戸数	人口	No.	区名	戸数	人口
①	中区	7,978	18,708	⑪	大甲区	22,924	77,656	㉑	外埔区	9,616	32,034
②	東区	27,613	75,396	⑫	清水区	26,851	86,350	㉒	大安区	5,451	19,409
③	南区	47,493	123,502	⑬	沙鹿区	28,835	91,338	㉓	烏日区	23,916	73,647
④	西区	45,505	115,747	⑭	梧棲区	17,506	57,645	㉔	大肚区	17,450	57,207
⑤	北区	59,011	147,585	⑮	后里区	15,977	54,332	㉕	龍井区	22,690	77,236
⑥	西屯区	84,391	224,601	⑯	神岡区	19,259	65,496	㉖	霧峰区	19,974	64,898
⑦	南屯区	60,928	166,685	⑰	潭子区	35,955	107,530	㉗	太平区	62,179	186,271
⑧	北屯区	97,807	270,547	⑱	大雅区	29,107	94,488	㉘	大里区	68,703	210,285
⑨	豊原区	53,191	166,778	⑲	新社区	7,542	24,947	㉙	和平区	4,510	10,795
⑩	東勢区	17,363	50,952	⑳	石岡区	4,899	15,174		計	944,624	2,767,239

（参照）台中市政府民政局台中市人口統計：2016年12月現在　作成：山下昭洋

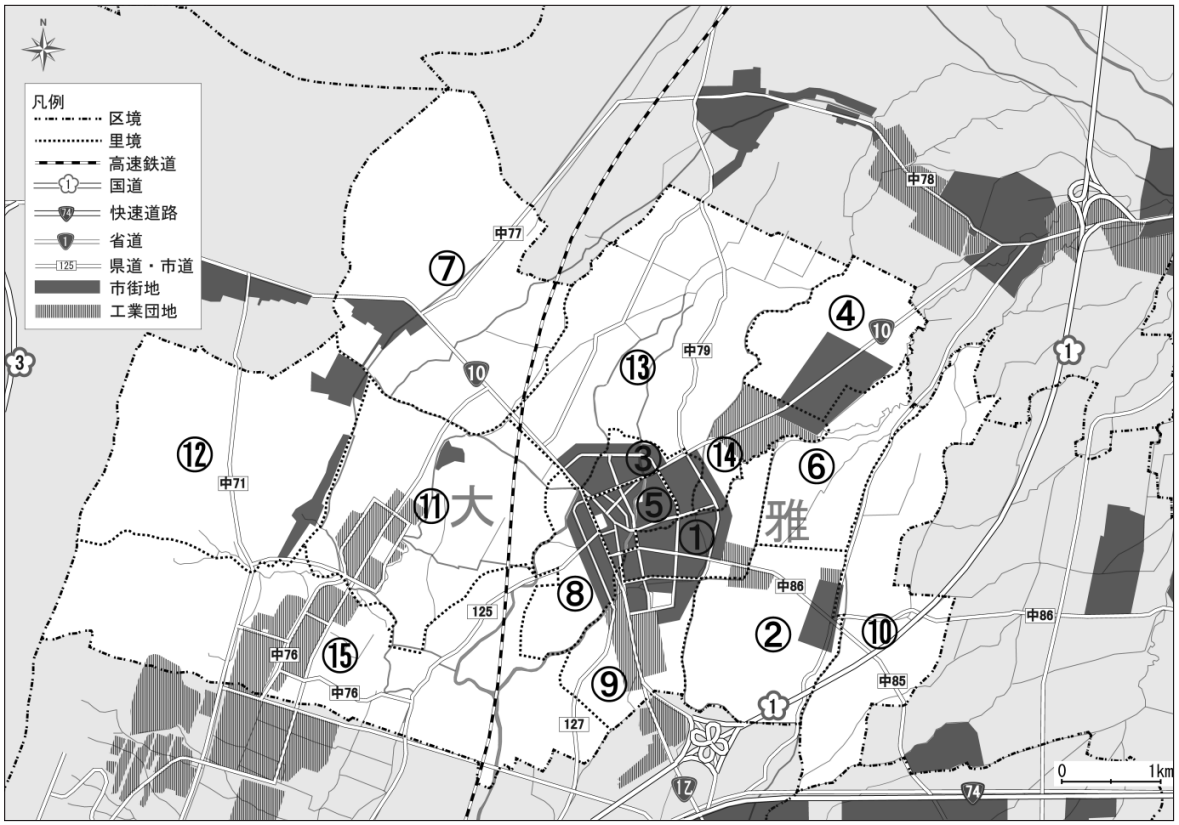

図２：大雅区行政図（交通）

参照：台中市空間地図査詢系統　作成：山下昭洋

表２：大雅区里名と人口

No.	里名	戸数	人口	No.	里名	戸数	人口	No.	里名	戸数	人口
①	二和里	2,277	7,379	⑥	大楓里	1,799	5,896	⑪	秀山里	1,089	3,887
②	三和里	1,873	6,374	⑦	六宝里	2,349	7,495	⑫	忠義里	1,666	4,471
③	上雅里	2,271	6,856	⑧	文雅里	2,289	7,113	⑬	員林里	3,275	11,254
④	上楓里	2,171	7,449	⑨	四徳里	1,711	5,599	⑭	雅楓里	1,450	4,444
⑤	大雅里	1,714	5,317	⑩	西宝里	1,668	5,893	⑮	横山里	1,505	5,061
									計	29,107	94,488

（参照）台中市政府民政局大雅区人口統計：2016年12月現在　作成：山下昭洋

圏を「台中彰化都会区」と定義した[13]。大雅区（当時は大雅郷）はその北端に入っていた。この事からも大雅区は行政院から台中の主要な都市圏の一部だと考えられていたと推察できる。

台湾において大雅区は小麦の産地として知られており、11月末頃の米の収穫後に裏作として小麦を栽培している。大雅区公所（区役所）は2003年からは「台湾小麦之故郷」（台湾小麦の里）と名を打って一大イベント（大雅小麦文化節）を毎年行っている。しかし、小麦の生産規模は区内の70ヘクタール程度（大雅区が全台湾の90％の収穫量）である。実際には、台湾での小麦栽培は大雅区でしか行われていないということで、小麦の里と称しているのである。歴史的に見ると大雅区は農業、特に米の生産地で有名であったが、現在の大雅区の産業を支えているのは工業であろう。大雅区には区内に「中部科学園区」が立地している。中部科技園区は行政院科学部が運営しているサイエンスパークで、主に電子製品、半導体などを製造している。

この様に、大雅区は台中市において、第一産業と第二次産業の両方の産業を抱えた地方中心都市であり、一方では、旧台中市の都心地域の衛星都市としての性格も併せ持っている。

そこで、本論文では、旧台中市街地を取り囲む地方都市群の将来の中央部に位置する大雅区の市街地形成過程を、有史前における状況から清朝時代までを、漢民族の流入と水陸の交通を交えて考察していくこととする。

台中の都市発展について書かれた論文には橋本正一（2001）の「台湾における都市形成の過程と特徴」がある。橋本は1880年に赴任した劉銘伝の政策に焦点を当て台中の発展を論じている。しかし、著者は台中盆地の台中都市圏全体の発展を考慮すべく、先ずは周辺都市の大雅区に焦点を当てることとした。

2．台中盆地における大雅区の概要

1）台中盆地の地形・土壌と大雅区の農業

台中盆地は台湾中西部に位置し、南北に約40km、東西に約9.5km、面積約380㎢の盆地である。台中盆地は四方を后里台地（北方）、南投丘陵（南方）、豊原丘陵（東方）、大肚台地（西方）、八卦台地（西南方）に囲ま

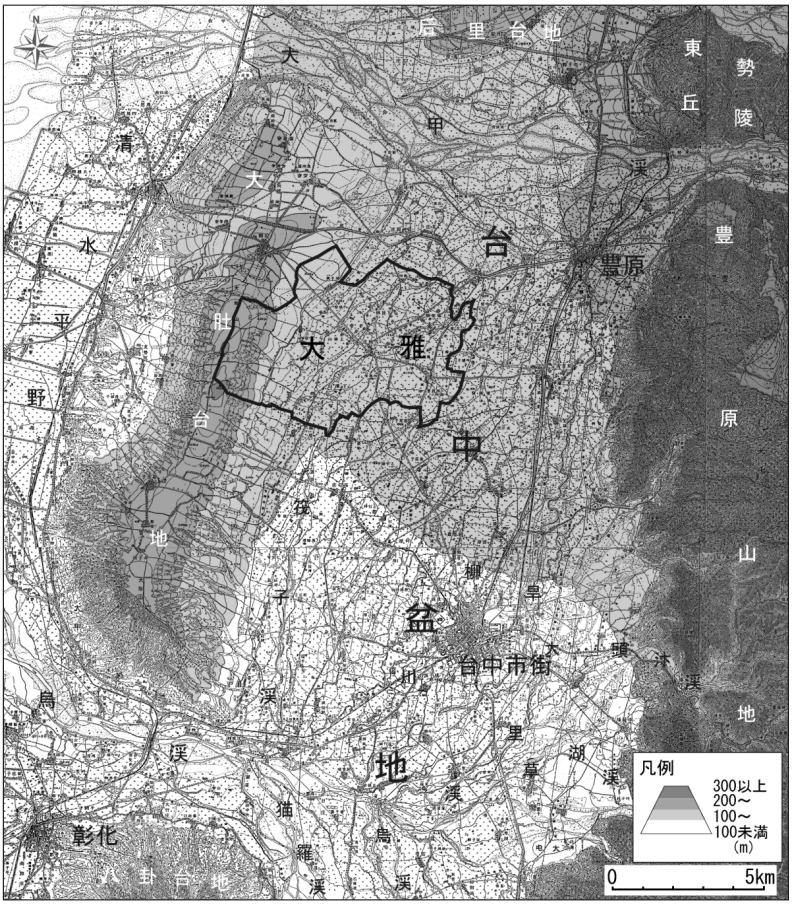

図３：台中盆地の地形と大雅区位置図

参照：陸地測量部（1927-1939）『五万分之一台湾地形図』　作成：山下昭洋

れている。盆地の中央には台湾中央山の合歓山（3,417m）を水源とする烏渓（大肚渓：延長：119.13km・流域面積2,026.60㎢）が東から西へと貫流している。烏系の本流は台中市霧峰区と南投県草屯鎮の県市境を流れ、大肚台地と八卦台地の間抜けて台湾海峡に至る。烏系の右岸が台中市となり、主な支流には東から大里渓・旱渓・柳川・筏子渓が流れている。

大雅区は台中盆地の北西部、大肚台地の尾根から東側の傾斜地に位置している。最も高い場所が標高約300mで、区域内のほとんどが海抜130～150mの緩やかな傾斜地となっている。筏子渓と名付けられた河川が区のほぼ中央を北から南へと貫流している。また、区の東側には筏子渓の支流となる港尾渓も北から南に流れている。土壌は砂頁岩の新沖積土であり、この色は赤褐色よりも赤い色である。特に筏子渓以西の大肚台地東側の傾斜地の土壌は「大雅系土壌（紅壌類）」と「西屯系土壌（紅壌類）」に分類されている[14]。大雅系土壌は大雅細砂質壌土・大雅粘質壌土・大雅砂質粘壌土に分類されている。大雅区の土壌ではこれらの前者２つが全般を占めている。大肚台地の海抜100m以上の傾斜地は西屯系土壌となっている。西屯系土壌と大雅系土壌の土質の違いに大差はないが、西屯系土壌には、５～20㎝程度の球形の石や小石、砂の混りが多い。これらの土壌は農作には不向きな酸性の強い土壌である。

この様に大雅区の土壌は農耕には不向きと思われるが、1906年２月４日の「台湾日日新報」の「台中農産物品評会の出品点数」に興味深い記事がある。「同会は台中庁下庶民競うて出品為したるは勿論～（略）～米の出品最も多く流石台中庁下は米の富源地なるを思はしむ程なり又米の内最も多きは霧峰庄にして二百四十七点、次は埧雅街にして二百十点、～（略）～審査の結果受賞者は埧雅街最も多くして三十七人～（略）」と書かれているが、引用中の「埧雅街」は「大雅」の旧称である。また、同年２月11日の同紙の記事、「台中管内の田畑」でも「（略）～各区は何れも水田多く中にも犂頭店、四張犁、梧棲、茄投、塗葛窟、埧雅、牛罵頭～（略）～等の各区は殆んど水田を以て充たされ畑地の如きは皆無と謂ふも不可なきが如し」とあり、稲作が「大雅」にとって重要な作物であったことが推察できる。水田造りには畑作と違い、ある程度の年月を要する。しかし、記事掲載の1906年は日本統治の開始後わずか11年である。よって、大雅区は清朝時代にはすでに稲作が主要産業になっていたと考えるべきであろう。

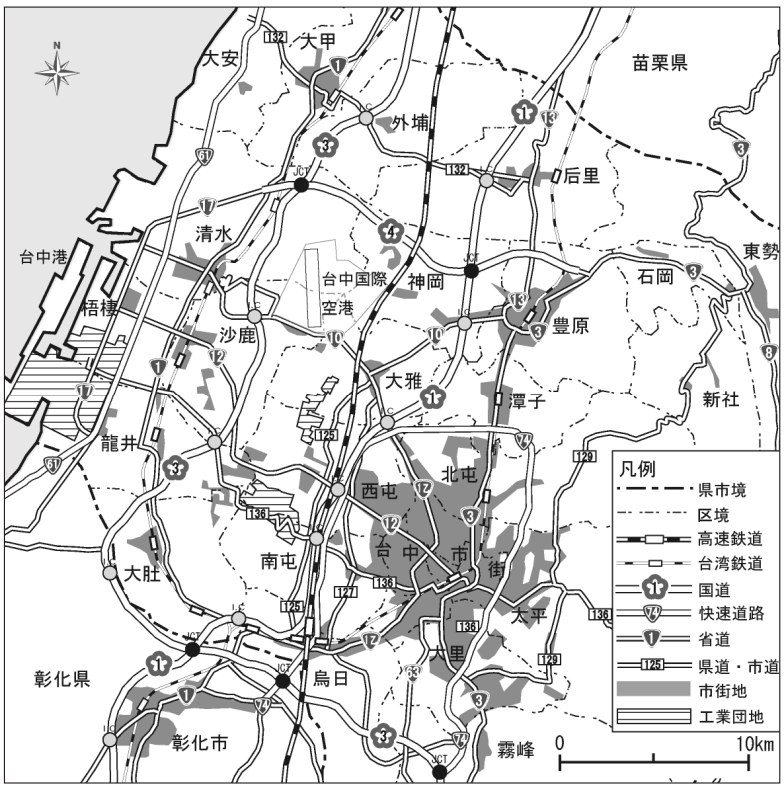

図４：台中市内の主要交通路

注）市街地は1999年「二万五千分一経建版地形図」を基に復元
中央研究院「台中百年歴史地図」を基に山下昭洋作成

２）台中盆地の交通体系と大雅区の工業

交通体系を見てみると、台中盆地は台湾中部に位置していることから台北市と台南市・高雄市などとの南北交通の経路としての交通の便もよく、台中市は高速鉄道・高速道路・空港・港湾の全てを備えている（図２）。

鉄道では高速鉄道（高鉄）が台中市を南北に縦貫していて、烏日区には高鉄台中駅がある。台湾鉄道（台鉄）の台中線（山線）[15] と海岸線（海線）[16] も南北に縦貫している。

高速道路では国道１号線[17] と国道３号線[18] が市内を南北に縦貫している。国道４号線[19] は清水区から豊原区までを横断しており、清水JCTで国道３号線と、神岡の台中JCTで国道１号線と交差している。

省道は快速公路と一般道の２種類に分かれている。快速公路は高架の自動車専用道路で省道74号線と省道61号線がある。74号線は国道３号線彰化の快官JCTから台中都市部の沿線を環状に走り、霧峰JCTでまた国道３号線とつながっている。61号線は海岸沿いを南北に縦貫している。

一般省道では１号線（１乙号線）・３号線・８号線・10号線・12号線・13号線・63号線が走っている。１号線と３号線、17号線は台中市内を南北に縦断している。８号線は豊原から花蓮へつながっており、中部横貫公路とよばれている。その他、１乙号線と12号線は台中駅から台中港をつなぐ主要道路である。また、海外からのアクセスでは、台中国際空港が沙鹿区・清水区・神岡区・大雅区にまたがって立地している。海からは清水区・梧棲区・龍井区の３区にかけて台中港が築かれており、台湾における主要貿易港となっている。

このような交通の利便性もあって、台中市内には主要工業団地が幾つか設けられている。台中市内で代表的な工業団地は大雅区と西屯区にまたがる「中部科学園区」、西屯区と南屯区にまたがる「台中工業区」･「文山工業区」、と清水区と梧棲区と龍井区にまたがる「台中国際港加工区」の４工業区である。これらの内の中部科学園区は大雅区と西屯区にまたがって立地しており、2003年から運営が始まった新しい工業団地である。2017年現在でも新たな工場が誘致されていることからも、今後の大雅区の発展に影響を与えると予想される。

現在、台中市の中心市街地は省道74号線の内側に形成されており、それを取り囲むように大里区・太平区・潭子区・豊原区・大雅区・烏日区の地方都市が市街地を形成し衛星都市をなしている。図２は中華民国内政部（1999年版）発行の「中華民国台湾地区二万五千分之一経建版地形図」から各区の市街地と国道及び省道を抽出して作成した図である。この図から、衛星都市の市街地は旧台中市の市街地から伸びた幹線道路沿いに放射状に立地していることがわかる。また、台中市を取り巻く各衛星都市間をつなぐ環状道路も確認できる。

３．宗族の移動からみる「大雅」への人の流入期

１）平埔族の時代から漢人入植期

台中における歴史的な人の動きは、陳紹馨（1964）『台湾省通志稿』や台中県政府編（1989）『台中県志』や国立中興大学編（2008）『台中市志』等に詳しいので、ここではこれらの書籍の内容を図示し、まとめることとする。

日本統治時代開始以前の台湾中部の人の流れは大きく２つに区分できる。その境界は17世紀中頃の漢人入植開始であり、それ以前は先住民居住時期で、それ以後は漢人入植と「分類械闘」の時代である。

械闘とは「中国で、部落間・宗族間の利害対立から、武器をもって行った闘争。清代、華中・華南・台湾に多く、水利の争いなどがその原因となった。」[20] とされており、台湾では平埔族と漢人や、漢人間では宗族間で閩南人[21] と客家人[22]、閩南人でも出身地で泉州と漳州など複雑に分かれて闘争が繰り返された。そのため、分類械闘と呼ばれている。清朝時代の台湾では「三年小一変、五年大一変」と呼ばれるほど分類械闘が頻発していた。

①平埔族の居住時代と地域

17世紀半ば以前に台湾中部の平地や丘陵地帯に先住していた人々は、平埔族[23] と言われている先住民であった。当時、台中一帯に居住していた平埔族は５族で、バブザ（Babuza・巴布薩）族・ホアニャ（Hoanya・洪雅）[24] 族・パポラ（Papora・拍瀑拉）族・パゼッヘ（Pazeh・拍宰海）族・タオカス（Taokas・道卡斯）族であった。平埔族は主に狩猟（鹿・魚類）を中心とした生活をおこない、非定住性の強かった民族であると言われている。しかし、芋類や粟などの雑穀の栽培をおこなっていた形跡があり、部族単位で、ある程度の集落を形成していた可能性がある。また、17世紀に入りオランダ人が台湾に水稲栽培を持ち込んだ。そのため平埔族は、それ以降は定住型が増えていったのではないかと著者は考えている。17世紀ごろの台中における先住民の居住地域は図４と表３に表している。

図４を見ると、清水平野にはパポラ族の牛罵頭・沙

表３：17世紀頃の台中地区の平埔族

民族名	居住地	現在の地名
バブザ族	猫霧揀社	南屯区春里社
ホアニャ族	萬斗社	霧峰区萬斗里
パポラ族	水裡社	龍井区龍泉里
	沙轆社	沙鹿区
	牛罵社	清水区
	大肚社	大肚区
パゼッヘ族	烏牛欄社	豊原区烏牛欄里
	樸仔籬社	豊原区の一部東勢区・石岡区・新社区
	阿里史社	潭子区
	岸裡九社	神岡区・豊原区・内埔区
タオカス族	大甲西社	大甲区
	大甲東社	外埔区大東里
	日南社	大甲区日南里
	双寮社	大甲区建興里

参照：『台湾県志巻二住民志第一冊（人口篇・氏族編）』　作成：山下昭洋

轆・水裡・大肚の社が大肚台地の山麓部に形成されていた。これは、台地からの地下水の湧水があったためだと推察できる。

台中盆地の海抜100m以下の低地には、バブザ族の猫霧揀（ヴァヴサガア）社[25]があるのみで、その他には先住民の集落は見られない。猫霧揀社は現在の南屯区春社里にあったと推定されている。この猫霧揀社も大肚台地山麓に位置し、旧地名に「番子井」などが残っているため、湧水が得やすかったためだと推察できる。

台中盆地の海抜160-175mの地域（現在の神岡区・豊原区一帯）には岸裡社を中心としてパゼッヘ族の社が集中していた。この地には北辺に大甲渓が流れ、比較的高地であったことから氾濫の危険性もなく水を得られやすかったため、人々が定住したのではないか推察される。

同じように大甲の大甲東社・大甲西社も后里台地の湧水地に集落が形成されたと言えるであろう。日南・双寮社は大安系の扇状地に形成されている。

図から烏渓の流域となる台中盆地には海抜100m以下の土地が多く、氾濫原であったため平埔族の定住がなかったと推測される。

1624年、オランダ人が台南に上陸を開始し、台湾統治を開始する。オランダによる台湾統治は1661年までの37年間であったが、台湾中部に残っているオランダ時代の足跡は、大肚台地の西側の清水平野の大肚区にある「王田」[26]の地名や、沙鹿区にある「紅毛井」[27]などがある。

この時代の「大雅」は「阿河巴」と言われていた。パゼッヘ族が阿河巴と呼んでいた範囲は現在の大雅区・神岡区一帯を指していた。

②漢人入植経路

1644年、中国では明朝が滅亡し、清朝が起こった。明朝の遺臣であった鄭成功[28]は1661年に台湾へ軍を派遣し、当時、台湾を統治していたオランダを追い出すことに成功した。「反清復明」（清朝に抗して明朝を復活する）を狙う鄭成功は、中国大陸から多量の漢人を引連れて渡台してきた。その数は３万７千人[29]にも上ると推測されており、この渡台者たちの食糧問題が急務となった。漢人の台湾中部への入植が始まったのはこの頃からであった。しかし、この時期の台湾中部への漢人入植は現在の彰化県の鹿港や、台中市の沙鹿・大肚・大甲などの海沿いの平野部のみであった。この時代を鄭氏政権と呼んでいるが、この時期に渡台した漢人は15万人程度だと言われている。ただし、鄭氏政権が滅亡すると、漢人のほとんどが清朝政府によって強制的に中国大陸へ引き揚げさせられた。

1683年、鄭氏政権が滅亡し、代わって清朝が台湾を統治することになった。しかし、清国内では台湾の放棄が唱えられていた。それに意見したのが施瑯[30]である。施瑯は台湾放棄に反対し、移民を奨励した。ただし、清朝政府は台湾経営に消極的で、「台湾編査流寓則例」を発布し、台湾への漢人の渡航を制限した。この条文で重要なのが次の２つで、１つは渡台に対して、家族での渡航の禁止とすでに家族がある者はその後を追うことも禁止、２つ目は客家人の渡台の禁止である。この二項は、

漢人の台湾入植に大きな影響を与える結果となった。一つ目の結果、渡台者は若い男性が中心となり、男性偏向社会となり後に「有唐山公、無唐山媽」（漢人系の父はいても漢人系の母は無し）という諺が生まれた。これは、漢人男性と先住民女性の族外婚が行われ、先住民（特に平埔族）が急速に漢化されたことを意味する。そして、平埔族は徐々にその数を減らしていくこととなった。二つ目は、初期の段階で客家人の渡台が制限されため、鄭氏政権がすでに開墾していた土地（台湾府付近）の多くとその周辺地域（嘉南平野地域）を福建系の閩南人に占められ、客家人は未開の新たな土地（彰化県や鳳山県の端の方）に入植せざるを得なくなった。

台中における漢人入植の過程は、その進入経路と時期から、台中海岸平野部入植と台中盆地南部経路からの入植と台中盆地北部経路からの入植の３つに分類し説明する（図５）。

台中に最も早く漢人の入植が開始されたのは、海岸の平野部からで、1701年（康熙40）に始まった。最初は、漳州系漢人が鹿港を経由して、鄭氏政権時代に開拓されていた大肚に上陸し、その一帯の開墾を始めた。それと同時に、その一部が海翁窟（大安巷）に上陸し、鄭氏政権時代に開墾されていた下大安・頂大安付近に入植を始めた。また、同じころ、鹿港から閩籍の林・張氏と、粤籍邱氏が九張犁・日南・鐵砧山脚付近を開墾する。1706年（康熙45）、大甲に閩南人・客家人が入植する。雍正年間（1723-1735）に入り、殷玉漳らが梧棲（五叉港）付近の開拓を始めると、雍正年間末には、閩南人と客家人が牛罵頭社、沙轆社に至った。1736年（乾隆元）に客

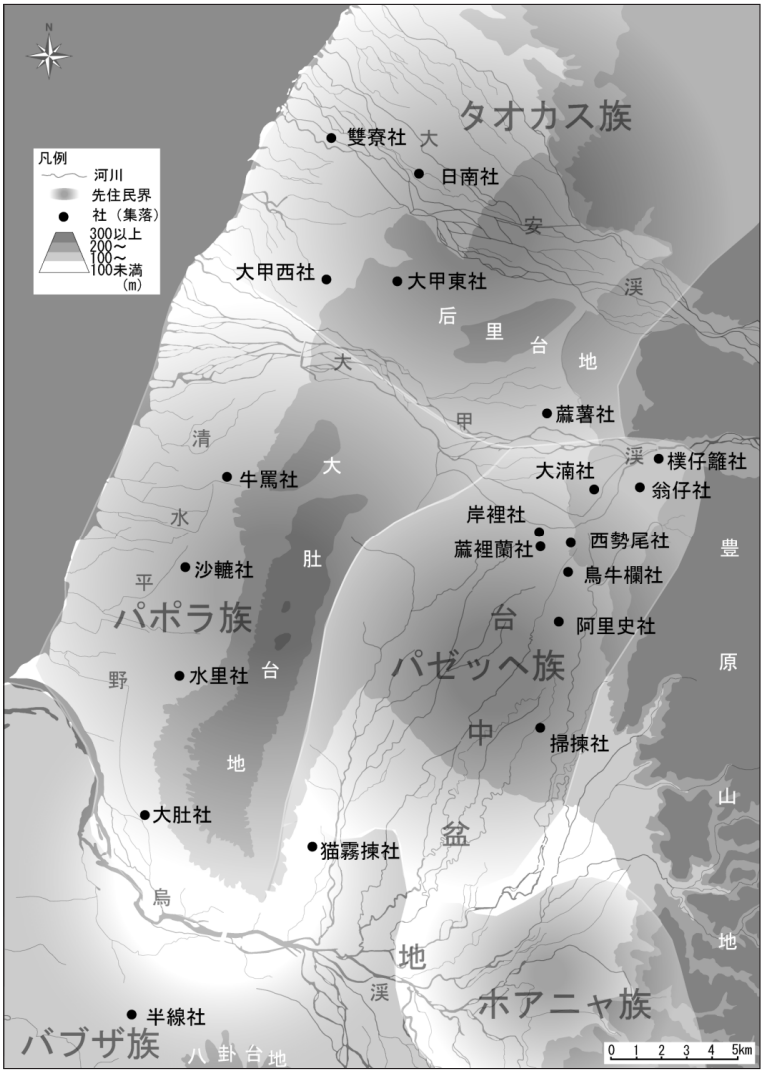

図５：清朝統治初期の台中地区の平埔族民族別居住地位置図

参照：陸地測量部（1927-1939）『五万分の一台湾地形図』・中央研究院民族学研究所数位典蔵「台湾平埔族分布簡図」
施添福（2006）『台湾地名辞書巻十二　台中県（一）』「図２－４　清代台中地区平埔族社分布図」
陳紹馨（1964）『台湾省通志稿巻二　人民志人口篇』・台中県政府（1989）『台中県志巻二　住民志』

作成：山下昭洋

家人の呉瓊華が大肚台地を東進して沙鹿の公館に達する。一方、閩南人の林・戴・石氏は清水平野を南下し、龍井の茄投地区へ入植する。1755年（乾隆20年）代に入り閩南人の陳氏が龍井の水裡一帯に入り、1775年（乾隆40）代になって、麗水の塗葛堀に入った。

次に、台中盆地の南側からの進路について、1710年（康熙49）の泉州人の張国による「張鎮荘」開拓の政府への願い出たことが最初である。「張鎮荘」は台中盆地内のバブザ族の猫霧揀社の地域である。同じ時期、大肚方面も開開墾され始めたが、本格化したのは1735年頃（乾隆初期）に王田圳[31]を建設し始めてからである。その後、張鎮荘は1721年（康熙60）の朱一貴の反乱の際に、清朝の鎮圧軍指令の藍廷珍が張鎮荘の周囲を開墾したことから、「藍張興荘」と呼ばれるようになった。同年、行政管轄区の猫羅揀堡（後の藍興堡、図５中では「藍興堡」）ができると、大里杙（大里）や鳥榕頭（太平）も包括された。その後、開拓民が徐々に増えていき、1731年（雍正10）に犂頭店街が出現した。1746年（乾隆11）に漳州人の林氏が旱溪に入植した。そして現在の台中市の中心となる大墩街が形成されたのは1764年（乾隆29）頃で、その頃の盆地の中心地は大墩よりも、犂頭店の方であった。

ところで、この台中盆地の北側からの漢人進入経路には二人の人物が大きく関わっていた。一人はこの一帯を勢力下としていたパゼッセ族の岸裡社の阿穆（阿莫）と広東潮州人の張達京という人物である。

阿穆は1699年（康熙38）年タオカス族の呑霄社（現：通宵）の乱の平定に際し、清朝側に協力した功績に、大甲渓の北岸より南岸（岸裡・掃棟・烏牛欄、阿里史・樸仔籬）の５社へ移動する。また、この地域の初代土官[32]にも任じられた。その後、阿穆は1716年（康熙55）に政府に猫霧揀（台中盆地）の開墾の許可を願い出る。その結果、この地に漢人が入植し始めた。

他方、張達京は広東潮州生まれで、字を「振萬」という。元々、張は平埔族との通事[33]であり、医学にも通じていた。1711年（康熙50）に渡台し、台中盆地北部一帯に勢力を持つ岸裡社に1723年（雍正元）に入ると、当時、この一帯の社の土官であった阿穆に気に入られ、その娘と結婚し「番仔駙馬」とも呼ばれた。

1723年（雍正元）に張達京は、平埔族から「阿河巴」（阿河覇）と呼ばれていた荒野に水利を施すことで土地と交換していくというやり方で、開墾地を広げていった。また、この開墾には広東からの客家人入植者が多かった。

この張達京が開いた土地を「張振萬業戸」といい、大雅区もこの土地に含まれていた。「大雅」の旧称「埧雅」が客家語読みであるのはこのためである。

1732年からは、張達京は漢人の陳周文・秦登監・廖朝孔・江又金・姚徳心の６人で「六館業戸」を結成し、大甲渓の樸仔籬口（現在の石岡区）から圳を引き、灌漑をおこなった。このためこの開拓地は「六館業戸地」と呼ばれている。1933年（雍正11）には、張達京の兄の張達朝（張承祖）に揀東下堡の七張犁一帯を開拓させた。この開拓地を「張承祖業戸地」と呼ばれている。

また、上記とは別に台中盆地の北東側に位置する石岡や東勢は、1760年（乾隆25）以降に渡台の制限が緩和されて以降に客家人によって開拓される。石岡は1775年（乾隆40）に客家人の劉氏一族によって開拓された。東勢は1785年（乾隆50）年から客家人劉啓東らによって開拓され始めた。

以上のように、日本統治時代開始以前の台湾中部の人の流れの初期では、台中盆地一帯の開拓には平埔族と漢人が、漢人の中においても閩南人と客家人が、閩南人においても泉州人と漳州人とがのように、複雑に民族・宗族が絡み合っていた。

２）台中における多様な人間集団間の武力闘争（分類械闘）期

台湾の清朝時代の康熙年間から雍正年間（1684-1732）にかけては漢人の台湾渡航が制限されていた時期である（表４）。そのため、台中に漢人の本格的入植が始まったのは1732年（乾隆５）以降である。しかし、それ以前にも「台湾編査流寓則例」で規制された以外の漢人は徐々に渡台していた。漢人の人口の増加に伴い、台湾では多様な人間集団の武力闘争が発生するようになった。これを、台湾では「分類械闘」と呼んでいる。械闘とは武力闘争のことである。これが、先住民対漢人、漢人においても閩南人対客家人といった宗族によるもの、閩南人においても出身地によって泉州人対漳州人のように様々な形態に分かれて行われていた。それで、これらの武力闘争を総称して分類械闘と呼んでいる。台湾で最初に発生した分類械闘は、1721年（康熙60）に発生した朱一貴の乱が起因となった。朱は福建漳州出身の農民であった。台湾南部の鳳山県で養鴨業を営んでいたが、重税に悩んでいた農民の首領として蜂起した。当初はこれに広東潮州の社君英ら客家人が加わったが、後に閩南人と客家人が仲間割れし、閩粤械闘に発展した。これが台湾で最初の分類械闘である。

次に台中に関係する分類械闘は1731年（雍正９）の大

甲西社の乱で、これは平埔族と漢人の争いであった。この乱には大肚社・沙轆社・牛罵頭社・水裡社・大甲社・樸仔籬社・阿里史社が加わった。しかし乱の平定後、大甲西社が徳化社に、沙轆社が遷善社に、牛罵頭が感恩社に改名させられた。

表４：清朝時代台湾の漢人渡航状態

西暦	中国暦	期間（年）	状態
1684-1732	康熙22－雍正10	48	制限
1732-1740	雍正10－乾隆５	8	緩和
1740-1746	乾隆５－乾隆11	6	制限
1746-1748	乾隆11－乾隆13	2	緩和
1748-1760	乾隆13－乾隆25	12	制限
1760-	乾隆25－		開放

参照：陳紹馨（1964）『台湾省通志稿巻二　人民志人口篇』
作成：山下昭洋

そして最も台中地域に影響を与えた分類械闘は1786年（乾隆51）から始まった林爽文の乱である。林爽文は福建漳州の人で渡台後、大里杙で開墾に従事していた。この時期はすでに台湾への渡台の制限も緩和され、多数の漢人が台湾に渡台しており、土地や水利をめぐって、小規模な分類械闘があちこちで頻発していた（表４・５）。そこに、諸羅県（嘉義）で発生した分類械闘により、追われた人々が大里杙に逃げ込んできた。そのため、林爽文はこれらの人に応える形で決起した。この林爽文は天地会であったため「反清復明」を掲げたので、乱は台湾全土に飛び火した。この時、台中の商業の中心地であった犂頭店は林一党の焼打ちに遭い焼失した。その後、犂頭店は復興されたが、台中の商業の中心地は西方の大墩（現台中市街地）に移った。この乱は閩粤械闘も引き起すこととなった。これにより台中盆地内にいた多くの客

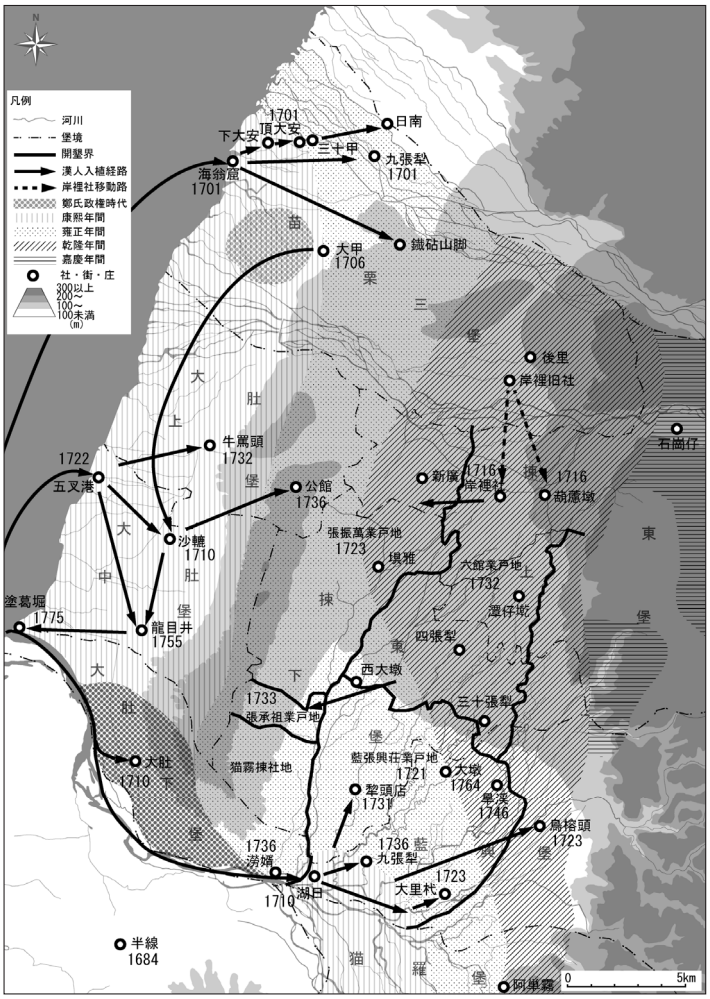

図６：清朝統治時代初期の台中における漢人の入植図

参照：陸地測量部（1927-1939）『五万分の一台湾地形図』
施添福（2006）『台湾地名辞書巻十二　台中県（一）』「図２－５　台中地区漢人墾殖路線與時代」
台中県政府編（1989）『台湾県志巻一　土地志』、同『台中県志巻二　住民志』
国立中興大学編（2008）『台中市志　地理志』

作成：山下昭洋

家人たちは戦乱を避けるため、当時すでに開拓が始まっていた台北盆地の北東の内陸部にある東勢地方に逃げて行ってしまった。乱は1788年（乾隆53）に鎮圧されたが、その後、閩南人が客家人に代わって台中盆地に入植した。こういった分類械闘は清朝統治時代全般にわたって発生し、1862年（同治元）の戴萬生の乱が平定された1864年（同治3）頃には、台中盆地に客家人の姿がほとんど見られなくなってしまったのである。

大雅区の旧称が客家語読みの埧雅であるにも関わらず、現在、大雅区に客家の人々がほとんど住んでいないのは、このような分類械闘が原因である。

表５：清朝時代の台中地域に関する分類械闘

西暦	中国暦	発生地	事件名	械闘種類
1721	康熙60	岡山後全島	朱一貴の乱	
1722	康熙61		朱一貴の乱続き	閩粤械闘
1731	雍正９	大甲西社	林武力らの乱	
1782	乾隆47	彰化刺桐脚		漳泉械闘
1786	乾隆51	彰化・鳳山	林爽文・荘大田の乱	
1786	乾隆51	彰化		閩粤械闘
1787	乾隆52	全島	林爽文の乱	
1787	乾隆52	彰化		閩粤械闘
1788	乾隆53	全島	林爽文の乱平定	
1795	乾隆60	彰化	陳周全の乱	
1806	嘉慶11	彰化		漳泉械闘
1809	嘉慶14	彰化		漳泉械闘
1826	道光６	彰化		閩粤械闘
1843	道光23	台湾県	郭光候糾衆抗官	
1844	道光24	彰化		漳泉械闘
1847	道光27	台湾県下	鍾阿三等反乱	
1847	道光27	大甲		械闘
1853	咸豊３	台湾県下	土匪李石の乱	
1862	同治元	彰化、後全島	戴萬生の乱	
1863	同治２	彰化、後全島	戴萬生の乱続き	
1864	同治３	彰化、後全島	戴萬生党派の乱	
1867	同治６	彰化、集集	陳心婦の乱	
1888	光緒14	彰化	施九段の乱	

参照：陳紹馨（1964）『台湾省通志稿巻二　人民志人口篇』
作成：山下昭洋

４.「大雅」の集落形成

１）河川交通の結節点

台湾では清朝時代末期に至るまで道路整備に重点がおかれなかった。これは分類械闘や「羅漢脚」[34] による略奪行為が原因である。当時の台湾では道を作ると外敵が集落に侵入しやすくなったからである。よって道路が整備される以前の台湾の交通手段は河川を利用した河川交通であった。

清朝統治時代以前の台湾で使用されていた川舟には大きく二種類のものがあった。一つは先住民が使用していた丸木舟（写真１）で、もう一つは、漢人が利用していた竹筏（写真２）であった。竹筏とは竹を組み合わせて筏にしたものであり、喫水が浅く、浮力が強かった。写真３は、1895年に撮影された写真である。写真には「台湾島東港河ヲ前衛本隊タル歩兵第十六連隊ノ一部渡筏ノ光景」と書いてある。この写真は現在の東港渓を渡河している写真であるが、「舟ハ竹製ニシテ十名以上乗ルニ能ハス」とも書いてある。しかし、写真を見る限りでは、浅瀬であるのに武装した兵６人と漕ぎ手２人の計８人が筏に乗っている。それを考えると、かなりの積載量があったはずである。そのため浅瀬の多い台中盆地の烏渓支流域でも運用が可能であったのではないかと推測している。また、この他にも河川流域を利用した交通には牛車（写真４）があった。当時の牛車の車輪は木製で、牛が歩ける場所なら道なき道も進めたと言い、写真５でも卑南大渓の河原を牛車で荷を運んでいる風景が写されている。

台中盆地の河川の位置を見てみると、盆地の中央を烏渓が東西に貫流している。その烏系に向かって南北に中小の支流が流れて込んでいる。盆地の東から主な支流には大里渓・旱渓、緑川・筏仔渓がある。

1780年（乾隆45）頃には六館業戸が築いた樸仔籬口大埤[35] を始め、大甲圳・王田圳・大肚圳も完成し、道光年間（1821-1850）年頃には、漢人による台中盆地の開拓はほぼ終息に向かいつつあった。この頃には台中盆地内の現在の行政区画の基となる街庄（日本における町村に相当）がほぼ出現している。そして、それらの街庄を繋いでいたのは河川交通だと著者は考えている。特に当時の台中盆地の主力生産物であった米・サトウキビ等の搬出には河川交通が利用されていたと考えている。このため農作物搬出のため、各支流沿いに搬出のための河港（若しくは集積地）ができていたと仮定している。

図６を見ると、大里渓には中流域に太平がありその下流域に大里があり、旱渓は上流域に潭子があり中流域には旱渓（現台中市街の一部）があり、緑川・龍渓には上流域に四張犁があり、その中流域に大墩や公館や犂頭店があり、筏仔渓の上流域には埧雅や馬崗があり、その中流域には西墩がある。そのため、筆者は台中盆地の烏渓支流域で生産された農作物は図中の矢印のように搬出さ

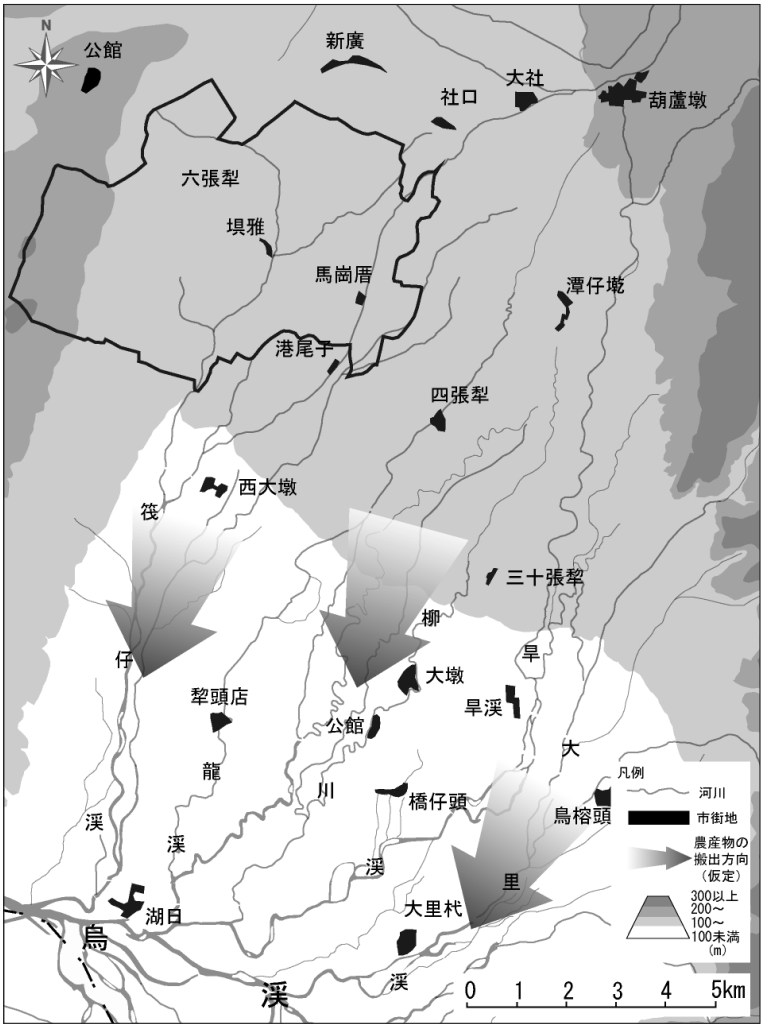

図７：清朝統治時代末期の台中盆地の水系と街庄位置

参照：陸地測量部（1927-1939）『五万分の一台湾地形図』
台中県政府編（1989）『台湾県志巻一　土地志』、同『台中県志巻二　住民志』
国立中興大学編（2008）『台中市志　地理志』

作成：山下昭洋

れていたのではないかと仮説を立ててみた。

「大雅」（塊雅）は筏仔渓の上流部に位置している。筏仔渓は旧塊雅街の南東端で東門支線（東方）と土地公汴（北方）が合流し大雅排水[36]となる。「大雅」はこの二本の支流の合流点（結節点）にできた街である。また、「大雅」は張振萬業戸地に立地しており、樸仔籬口上埤がひかれていた。そして、現在の大雅区内の北西部には六張犁といった農耕地を表す地名も残っている。これらから考えると、「大雅」はこの地域一帯の河港、若しくは農作物の集積地が発展した街であると考えるべきであろう。

２）陸上交通の結節点

『台中県志巻二住民志』によれば、道光年間から光緒年間の清朝時代の末期の台中一帯の状況については、「本県墾拓段階，由開発期邁入（開墾の段階から、発展の段階へ移行）」[37]した時期であると表現されている。

台湾で道路の建設が本格したのは劉銘伝の時代からである。劉銘伝は清朝末期の淮軍軍人で、1884年（光緒10）の清仏戦争でフランスの台湾上陸を阻止した。1885年（光緒11）台湾が省に昇格すると、初代巡撫として赴任する。劉は洋務派であったため、台湾の近代化に尽力した。特に台湾を三つの行政府（台北府・台湾府・台南府）に再編し、台中を台湾府として府都とした。劉の台湾での功績には鉄道敷設が有名であるが、劉は道路の建設にも力を入れている。台湾で道路建設が本格化したのは、この劉銘伝の撫順時期以降である。

以上から台中盆地に道路が敷設されたのは、清朝時代の末期であり、新しい交通手段と考えるのが妥当である。図７は日本統治時代の1904年に台湾総督府が製作し

た『台湾堡図』の中から主要な道路及び通路を分りやすく抽出した図である。『台湾堡図』が作成された時期日本統治が始まって10年以内であることから、清朝時代の道路の様子が残っていると判断したからである。

台中盆地の道路は、台湾府の府都となった台湾城（台中市街）を起点として、半線城と当時の外港であった塗葛堀[38]へ延びる（大西門）、三十張犁・潭仔墘・葫蘆墩（豊原）街へ延びる（北門）罩霧（霧峰）・草靴墩（南投草屯）南投へ延びる（大南門）を結ぶ道路が主要道路であった。これは城を中心として放射状に道ができたことを意味する。そして、これまでの水路の交通では南北の往来を主体としていた台中盆地の交通網に台湾城を中心とする新たな交通路が加わった。また、注視すべきは幹線道路以外の道路（小道）である。これまで、台中盆地における水路時代の交通は、烏系の支流を南北に往来する交通であった。しかし、この道路（小道）が出来てからは、大肚台地を超えて海岸平野へ抜ける東西方向への交通が出来たということである。その後、河川を利用する水路交通は衰退し、新たな道路による交通体系が構築されたのである。

塊雅（大雅）にはこの時期、台湾城と直結した道路は整備されていなかった。しかし、塊雅で重要であったのは、台中盆地北部の重要市街である葫蘆墩と関係しているのではないかと考えている。葫蘆墩から港（梧棲）へ抜けるには二つのルートが考えられる。一つは大社・社口・新廣（神岡）・公館・清水を抜けて梧棲へ向かうルートと、もう一つは大社・社口・塊雅・公館・沙轆から梧棲に向かうルートである。現在、省道10号線となっているのはこの二つ目ルートである（図８）。一つ目ルートが衰退した原因は公館から清水へ抜ける坂道が急勾配であったことが考えられる。その後塊雅には、台中市街から梧棲へ抜ける主要幹線道路である省道１乙号線[39]が引かれた。この省道乙１号と省道10は大雅区内で交差している。こうして大雅区は交通の結節点として、更にその市街地が発達するに至ったと考えられる。

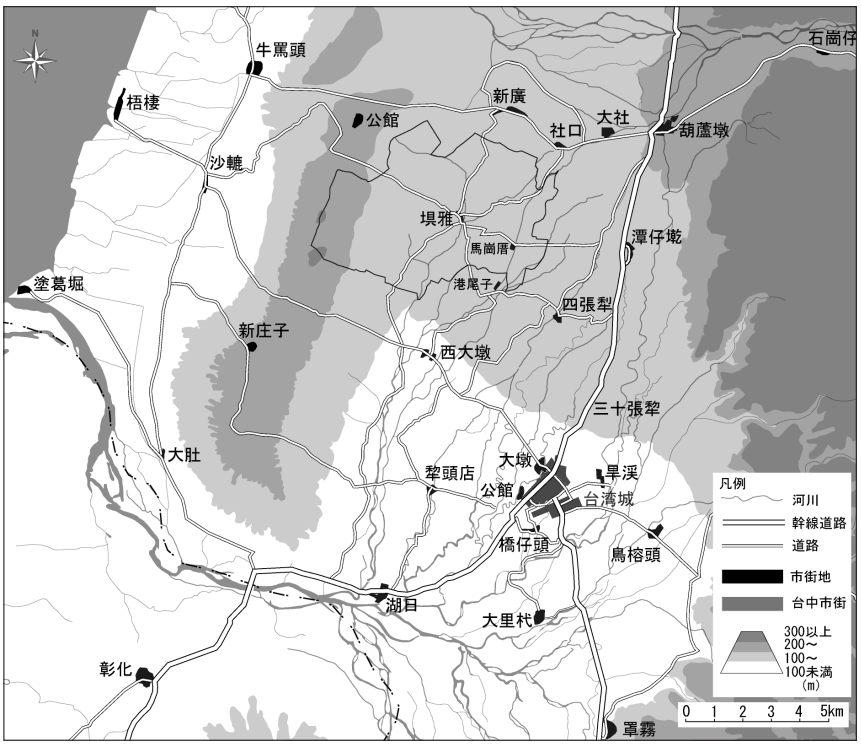

図８：清朝統治時代末期の台中盆地における道路図

参照：陸地測量部（1927-1939）『五万分の一台湾地形図』・台湾総督府臨時土地調査局（1904）『台湾堡図』
作成：山下昭洋

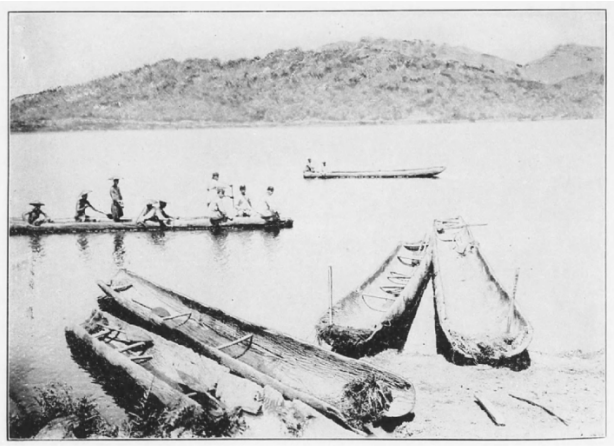

写真１：日月潭の丸木舟
出典：台湾総督府（1908）『台湾写真帖』

写真２：竹筏
出典：台湾総督府（1908）『台湾写真帖』

写真３：竹筏を使った台湾東港河口上流における日本軍の渡河風景
出典：陸地測量部（1895）『日清戦争写真帖』

写真４：台湾の牛車
出典：台湾総督府（1908）『台湾写真帖』

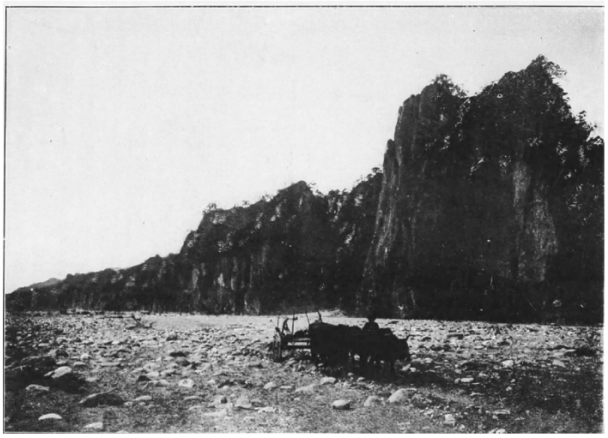

写真５：屏東卑南大溪の赤壁
出典：台湾総督府（1908）『台湾写真帖』

５．むすび

本研究では、大雅区における市街地の形成過程を考察する上で、台中一帯（台中盆地、清水平野を含む）の地理・歴史を含めた視野で検討を進めてきた。「大雅」の地名は、先住民の地名発音に客家人の漢字を充てて「埧雅」とし、これを更に日本統治時代に「埧雅」から縁起の良い日本式の文字を当てて「大雅」となり、この地名が「分類械鬪」などの歴史的な出来事を経て現在に至ったことを文献によって論証することができた。

歴史的な流れを見る過程では、漢人の台中地域への入植を図示することにした。それにより、台中盆地一帯が海岸地区・台中盆地南側・台中盆地北側の三方向から開拓されてきたことを、明確に示すことができた。

大雅区に市街地が形成される過程では、米の搬出に河川を利用した水路による交通が南北方向であったであろうことが推定できた。陸路については、劉銘伝の統治以

降の道路建設により、交通の方向が東西方向に変わって、「大雅」が新たな交通の要所となり、市街地が発展し始めたことが明らかとなった。

今後には、大雅区が日本統治時代及び戦後の戒厳令下の国民党統治時代を経て、どの様に発展していったのか、台中都市圏において大雅区がどの様な位置づけにあるのか、更に台中都市圏とその周辺の衛星都市との関係を追究していきたい。

注

1）埧雅（baa3-ngaa5）等の客家語（粤語）の発音記号は、発声が近い広東語拼音を用いている（「chineseconverter.com」のHPを参照）。

2）壩仔（pà-á）等の閩南語の発音記号は「教育部台湾閩南語常用詞辞典」（台湾）を参照している。

3）施添福編（2007）『台湾地名辞典　巻十二　台中県（二）』国史館台湾文献館p177

4）台湾の行政院直轄市には台北市・新北市・桃園市・台中市・台南市・高雄市の６都市がある。これ以外にも旧省轄市として、基隆市・新竹市・嘉義市の３都市がある。市の下の自治体は区に管轄され、県の下は鎮、郷となっている。

5）内政部とは日本の戦前の内務省に相当する国家行政機関であり、国土、人口、地方自治、警察、消防等を監督する機関である。

6）台湾、聯合報2017年８月４日報道。URI：https://udn.com/news/story/7320/2623471（2017.11.07最終確認）

7）人口増加率は台湾内政部調査2016年末の数値である。因みに高雄市の人口増加率は0.16‰となっている。６直轄市中５番である。

8）台湾中部とは行政部経済建設委員会が1979年に設定した「台湾地区総合発展計画」に基づいて分けられた地方の呼び名である。中部台湾とは苗栗県・台中市・彰化県・雲林県・南投県を包括した地方である。その他にも「台湾北部」「台湾南部」「台湾東部」の読んだ区分と「福建金馬」地方に分かれている。

9）台湾の司法院も三審制をとっており、最高法院（台北）の下、高等法院（台北、台中、台南、高雄、花蓮）、地方院が各直轄市に設置されている。

10）行政訴訟をおこなうのが行政法院で、以前は一審制で台北のみであったが、2000年以降二審制がとられることとなり、最高行政法院（台北）の下、高等行政法院が台北、台中、高雄に設置された。

11）県政下での地方自体の単位は「郷鎮」制がとられていたが、合併し総てが「区」となった。

12）里は市政下の最小自治単位として使用されている。県政下の最小自治単位は「里」と「村」になる。里下に「鄰」という行政組織がある。鄰は名前が無く番号のみで、鄰長は里長の任命によって決まる。自治権をもっておらず、行政上の組織のみの存在であるとされている。

13）「台中彰化都会区」都会区とは都市圏のことであり、行政部が2010年に発表した定義であったが2010年の台中県市合併により、この定義も消えた。この定義においては、当時の旧台中市内・彰化市・大里市・大平市・潭子郷・大雅郷・大肚郷・龍井郷・烏日郷・霧峰郷・和美鎮（彰化）・花壇郷（彰化）が含まれていた。

14）頼順盛・曾藍田（1989）『台中市発展史』p34, 35

15）台鉄の台中盆地を走る路線であり、竹南駅から苗栗を抜けて彰化駅に至る。台中市内には2017年11月現在、泰安・后里・豊原・潭子・太原・台中・大慶・烏日・新烏日・成功の10駅が設置されている。苗栗県の山間部を走る路線であるため通称は山線である。

16）台鉄の清水隆起海岸平野を走る路線で、竹南駅から台中港駅を抜けて彰化駅に至る。台中市内には日南・大甲・台中港・清水・沙鹿・龍井・大肚・追分の８駅が設置されている。海岸部の平野沿いを走る路線であるため通称は海線である。

17）台湾の高速道路（高速公路）は国道と称されている。国道１号線は中山高速公路とも称されている。台湾の高速道路は南北線が奇数番号で、東西線が偶数番号である。国道１号線の台中区間のICは后里・豊原・大雅・台中・南屯・王田の６ヵ所ある。

18）国道３号線はフォルモサ高速公路とも称されている。台中区間のICは大甲・沙鹿・龍井の３ヵ所である。

19）国道４号線は台中環線とも称され、台中市内を走る国道１号線と国道３号線を結ぶ幹線となっている。清水区が起点で、国道３号線とのJCTは中港（清水区）で、国道１号線とのJCTは台中（神岡）である。途中のICは神岡・后里のみで、終点の豊原からは省道３号線と接続する。

20）広辞苑「械闘」から引用

21）閩南人とは福建省南部出身の人のことで、閩南語（福佬語）を話す人々を指す。

22）客家人とは広東地方から台湾に渡たした人々で、客家語を話す人々である。粤人とも表記されている。

23）台湾の先住民は平地に居住していた平埔族と高地に居住していた高山族に大きく二つに分類される。台湾西部の平埔族は後に漢化が進み、そのほとんどが姿を消した。

24）台中県政府編（1989）『台中縣志巻一土地志全一冊』では「Hoonya」族となっている。安倍明義（1938）『台湾地名研究』では「アクリン」族となっている。

25）台湾では「社」とは先住民の集落のことである。

26）王田という地名はオランダが開墾した水田に使われており、オランダ王国の王から来た言葉である。鄭氏政権時代では「官田」という地名で残っている。

27）紅毛人とはオランダ人のことで、新北市の淡水区には紅毛城がある。紅毛城は、スペインの城であったが、オランダとの戦いで敗れ一度破壊されオランダ人により再建されたためそう呼ばれている。

28）鄭成功（1624-1662）は、福建省泉州出身父の鄭芝龍と日本人母の田川マツの間に生まれ、幼名は福松、明朝滅亡

後に台湾に渡り「反清復明」を唱え抵抗した。その時代を台湾では鄭氏政権時代（1662-1683）と呼んでいる。鄭氏政権は鄭成功の死後、三代で途絶えた。その後、清朝は台湾在住の漢人を殆ど強制的に引き揚げさせた。

29）陳紹馨編（1964）『台湾省通志稿巻二人民志人口篇全一冊』p116～119

30）施瑯（1621-1696）は、福建省泉州生まれ、元は鄭成功の部下であった。その後、清朝に降り台湾攻略に尽力する。

31）圳（しゅう）とは、用水のことである。

32）土官とは中国での「土司」のことであり、中国で、元朝以降に中国南西諸民族に与えられた官職である。台湾でも鄭氏政権時代から漢人に帰順した平埔族の長を土官に任じている。1740年代以降は「土目」に名称が変わった。

33）通事とは清朝時代の官職である。官職としては低級であるが、平埔族に対しては大きな権力を有しており土官よりも権限が強かった。

34）羅漢脚とは「台湾編査流寓則例」の弊害の一つで、渡台したものの仕事もなく家族もない経済的に下層に位置する男性が、着る服もボロボロで、裸足で闊歩していたのでそう呼ばれるようになった。械闘が始まると多くの羅漢脚が参加した。日本統治時代に入るとこれらの人を「匪徒」と呼ぶようになった。

35）樸仔籬口大埤は樸仔籬口上埤と樸仔籬口下埤を総称して呼ぶ呼び方で豊原の北東部石岡の樸仔籬から水を引き入れ、台中盆地の灌漑をおこなった。葫蘆墩東勢角老圳とも呼ばれている。

36）大雅排水は西屯区に入る直前で十三寮排水と合流し筏仔渓となる。

37）台中県政府編（1989）『台中県志巻二　住民志第一冊（人口篇氏族篇）』p26

38）塗葛堀は1777年（乾隆42）頃に福州から船団が来て貿易を始めた。1785年（乾隆50）以降は梧棲にも港町ができ台中は南北二港で機能していた。しかし、道光年間（1821-1850）には梧棲の港の機能が失われたため、一時衰退していた。この時期は塗葛堀が台中の外港の役割を果たしていた。しかし、1912年（大正元）大雨で流出し完全に失われた。その後、台湾総督府は梧棲を台中港と定め港湾計画を開始した。

39）戦後、省道１号乙線となる道路は、1904年の『台湾堡図』には見られないが、1939年の『台湾地形図』では完成している。よって、日本統治下のこの間に開通したものと考えられる。

文献

阿部明義（1937）：台湾地名研究．蕃語研究会

陳紹馨（1964）：台湾省通志稿巻二　人民志人口篇全一冊．台湾省文献委員会

大雅郷志編纂委員会（1995）：大雅郷志全一冊．台中県大雅郷公所

潘英（2000）：台湾拓殖史及其族姓分布研究－上．南天書局有限公司

伊能嘉矩（1928）：台湾文化誌全三巻．刀江書院

国立中興大学（2008）：台中市志-地理志．台中市政府

松井秀郎（2017．３）：台湾彰化県鹿港鎮における市街地の拡大について．地球環境研究．第19号95-102.

根橋正一（2001．３）：台湾における都市形成の過程と特徴．社会学部論叢（流通経済大学）．第11巻第２号．51-71.

彭桂芳（1979）：唐山過台湾的故事－全三冊．青年戦士報社

施添福（2007）：台湾地名辞書巻十二：台中県（二）．国史館台湾文献館

台中市政府編（1989）：台中市発展史－慶祝建府百週年紀念．台中市政府

台中市文献委員会（1972）：台中市志巻首全一冊．台中市文献委員会

台中市文献委員会（1972）：台中市志巻一土地志地理気候篇共一冊．台中市文献委員会

台中市大安区公所：認識大安「歴史沿革」．http://www.daan.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市大肚区公所：認識大肚「歴史沿革」．http://www.dadu.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市大甲区公所：認識大甲「歴史沿革」．http://www.dajia.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市大雅区公所人文課：認識大雅「歴史沿革」．http://www.daya.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市清水区公所：認識清水「歴史沿革」．http://www.qingshui.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市沙鹿区公所人文課：認識沙鹿「歴史沿革」．http://www.shalu.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市梧棲区公所：認識梧棲「歴史沿革」．http://www.wuqi.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中市烏日区公所：認識烏日「歴史沿革」．http://www.wuri.taichung.gov.tw/　最終閲覧日2017年11月25日．

台中県立文化中心編（1994）：中縣開拓史-学術研討会論文集．台中県立文化中心

台中県志（1989）：台中県志巻一土地志全一冊地理篇気候篇生物篇災害篇勝蹟篇．台中県政府

台中県志（1989）：台中県志巻二住民志第一冊人口篇氏族篇．台中県政府

富田芳郎（1972）：台湾地形発達史の研究．古今書院

呉密察（2007）：台湾史小事典．中国書店

尹章義（1989）：台湾開発史研究．聯経出版事業公司

Daya city formation in Taichung Basin of Taiwan before Japanese rule area

YAMASHITA Akihiro*

* Japanese Department, Providence university. Visiting researcher, Rissho university

Key words: Taiwan, Taichung, Daya city, City formation, Before Japanese rule area